

◎本ニュースレターは、木曽三川流域におけるエコロジカル・ネットワーク形成に関連する地域の取り組み情報を発信するものです◎

例年にないような厳しい寒さが木曽三川流域にも訪れていますが、現地活動を含め、今季もさまざまな取り組みがありました。最近、話題の池の水を抜く行事を2つ取材させていただきましたが、いずれも、寒いなかとてもたくさんの人が参加されていました。こうした人気の行事をきっかけに、地域の自然環境やその保全活動に興味を持ってくださる方が、もっともっと増えていくとうれしいですね。

■2018年2月18日（日）
笠松トンボ天国内の「トンボ池」で水抜き
テレビ番組の収録が行われ、多くの人で賑わいました
〔岐阜県笠松町米野 木曽川河川敷〕



笠松町に位置する木曽川の河跡湖や造成池一帯は、多くのトンボ類等の多様な生物が確認され、「笠松トンボ天国」として保護されています。

この地域で保全活動を行う「トンボ池を守る会」の呼びかけにより、外来種を駆除するなどし、トンボ類等の在来生物を保全するため、笠松トンボ天国内の「トンボ池」の水抜きが実施されました。この日は、テレビ番組（緊急SOS 池の水ぜんぶ抜く大作戦）の収録が行われており、数えきれないほど、多くの方が参加・見学されていました。

生きものの採捕は、この日を楽しみに訪れたという子どもたちなども参加して行われ、可児さん（トンボ池を守る会会長）は、「近年、水のなかに入って生物を自分で採る体験は希少になっている。この機会が、子どもたちが楽しく学ぶ場にもなればうれしい」と話してくださいました。

希少な魚類を含め、多くの生物が採捕されており、在来種ではギンブナ、モツゴ、タモロコ、ゼゼラ、ツチフキ、ナマズ、ウナギ、ドブガイ類など、外来種ではブルーギル、カムルチー、アメリカザリガニ、ミシシippiaアカミミガメなどがみられました。



ふだんのトンボ池からは想像できないほど、ほんとうに多くの人が集まっており、胴長やタモ網を持参で来られている方もたくさんいらっしゃいました。皆さん、どろんこでも、とても楽しそうだったのが印象的でした。

■2018 年 1 月 21 日（日）

海津市シンポジウム「海津のまちにすむととも珍しい魚 “ハリヨ” について学ぼう！」

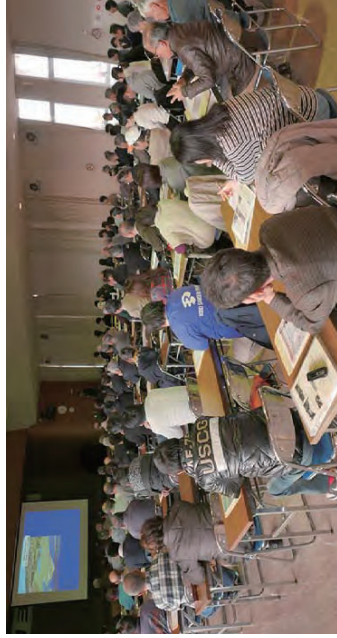
〔岐阜県海津市海津町 海津市文化センター〕

海津市・海津市教育委員会では、市内の津屋川等に生息するハリヨについて、多くの方々に知ってもらいたいという願いから「ハリヨシンポジウム-海津のまちにすむととも珍しい魚 “ハリヨ” について学ぼう！-」が開催されました。地域の方々を中心として約130名が参加し、熱気を帯びた一日となりました。

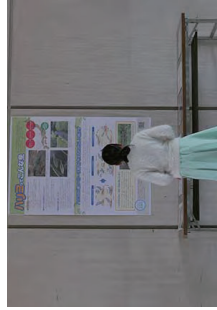
シンポジウムでは、大垣東高校理科科、原田さん（福井県立大学）による研究成果報告や小北准教授（福井県立大学）、森教授（岐阜経済大学）による基調講演がありました。

大垣東高校理科科からは、ハリヨの模様をスケッチすることでハリヨの生息数を推定するという興味深い研究成果が報告されました。津屋川水系清水池周辺に生息する約800もの模様をスケッチし、個体識別したうえで個体数の推定計算まで行ったそうです。

小北准教授は、ハリヨの生体実験、化学的解析と DNA 解析結果を結びつけた興味深いお話をしました。小北准教授によると岐阜県では生息環境の違いを背景に遺伝的な違いが生まれており、縄張り争いをすると岐阜県産のハリヨが全勝するそうです。また、岐阜県のハリヨは太く短く生き、滋賀県のハリヨは細く長く生きる生き方の違いもあるようです。この違いは長い時間



ハリヨシンポジウム会場の様子。大勢の人が参加されました



ハリヨの模様をスケッチしている様子。



会場前ロビーでは、ハリヨ写真展が開催されました

をかけて地域で育まれた独自性であり、独自性を守ることが大切であるとお話されました。

原田さんは、岐阜県と滋賀県のハリヨの老化に關係する DNA を比較した興味深い研究成果を報告されました。小北准教授の語られた生き方の違いに關連し、岐阜県のハリヨは滋賀県のハリヨより老化の進行が速いことがわかったそうです。

最後に森教授からハリヨを取り巻く状況のお話がありました。ハリヨは非常に貴重な郷土の財産であること、近年は外来種ヌートリアがハリヨの巣を破壊して繁殖が阻害されているというお話がされ、ハリヨの映像が上映されて締めくくられました。

■2018 年 2 月 18 日（日）

里川の生きものを守る「下池ピオトーブの池干し体験」が開催されました

〔岐阜県海津市南濃町 下池1工区ピオトーブ〕

かつてこの一帯に大きな池があったことから、いまでもさまざまな水生生物がみられる下池地域（海津市南濃町・養老町の境界付近）につくられた「下池ピオトーブ」では、地域の皆さんが協働で希少種等の生物保護に取り組まれています。

今回の行事は、ピオトーブの生態管理の一環として毎年実施されている「池干し」が体験できるもの（下池西部まちづくり協議会、下池地域農地・水・環境保全管理組合、東海タナゴ研究会、西濃農林事務所による共催）。親子連れを中心に、地元をはじめ、遠くは名古屋や春日井市などから、およそ150名近い参加者が集まりました。

この日の活動は、水位を下げたピオトーブでの生物採捕が中心で、子どもたちは、寒さを感じせないよううすで、泥んこになりながら、タモ網を手にとりを楽しんでいます。

また、講師の北島さん（東海タナゴ

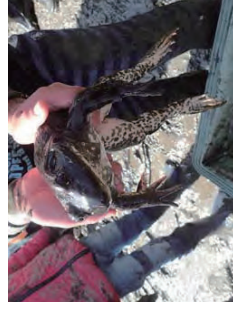


とても寒い日でしたが、生きもの保全に参加しようと、多くの人が集まりました

は、特定外来生物ウシガエルの幼体（オタマジャクシ）で、その他にも特定外来生物オオクチバス、タイリクバラタナシの役割や効果（田んぼに入れるため池の水をきれいにするなど）、それにより生物もすみやすくなることなど）た。ウキゴリ、ドジョウ、ミナメダカなどの在来種は保護され、後日、この日から数日間干し上げてきれいにしたピオトーブに戻されることでした。



みつけた魚の増殖や生態について、講師の北島さんから解説がありました

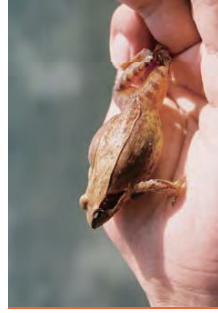


採捕したウシガエルのほぼオタマジャクシでしたが、なかにはこんなに大きな成体もみられました



●ツチフキ

主に流れのゆるやかな池沼や水路などの泥底の場所にすんでます。口吻は短めに突き出ている、泥のなかの生物を食べます。また、短い口ひげがあります。



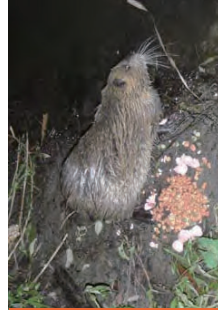
●ニホンアカガエル

繁殖期は早春（主に2～3月）で、主に水田やその周辺の水たまりなど、遠くで日当たりのよい水域に卵を産みます。名前のとおり、赤っぽい体色をしています。



●オオヨシキリ

夏鳥で、主にヨシ原などの草地で、草をお柄杓に串ねた巣をつくって繁殖します。「ギョギョシ」と聞こえる大きな鳴き声で、口の中の赤色が印象的です。



●ヌートリア

南アメリカ原産の外来種。毛皮を利用しようと持ち込まれましたが、養殖場から逃げ出すなどして野外に定着しました。草食ですが二枚貝なども食べることで知られています。



●カキツバタ

湿地に生育する多年草で、春頃に濃い紫色の花を咲かせます。古来から歌や絵画の題材として親しまれてきた種物で、愛知県の県花です。

●木曽川中流域ワンドでみられる生きもの紹介

木曽三川流域生態系ネットワークの保全対象のひとつ「氾濫原環境」に形成されるワンド群では、指標種イタセナバフ以外にもさまざまな生物が生息・生育しています。右に紹介するのは、木曽川上流河川事務所による調査で確認された種のほんの一部です。起小学校の環境学習会（本誌裏面参照）の例では、ワンド2箇所をおよそ1日調査してみつけた約20種類の魚類を観察しましたが、児童らは「こんなにたくさんいるなんて」と驚いていました。

心配なのは、オオクチバスやブルーギルなどの特定外来生物を含め、外来種も数多く確認されていることです。調査中にヌートリアが泳いでいるのを見かけることもしばしばです。

■2017 年 11 月 22 日（水）

イタセンパラ飼育に取り組む起小学校児童の皆さんが、木曽川ワンドの環境を学びました

〔一宮市起 木曽川河川敷〕

現在、校内でイタセンパラの飼育に取り組んでいる一宮市立起小学校の 4 年生児童らが、氾濫原生物がすむ木曽川ワンドに訪れ、河川の自然環境や水質について勉強されました。ワンドを目の前に、木曽川上流河川事務所職員より、ワンド環境やその保全に関するお話を聞いた後は、魚の名前を調べたり、バックテストを用いた簡易水質調査などを体験しました。

当日、観察した魚類は、ワンド環境調査で採捕されたもので、ゼゼラやツチフキ、トウカイヨシノボリ、特定外来生物ブルーギルなど約 20 種類。ほかにも貝類、エビ類などがみられ、ワンドが多くの生物のすみ場であることが感じられました。

児童らからは「木曽川にイタセンパラ以外にもいろいろな魚がいることを初めて知った」「ワンドを見てすごいと思った」などの感想が聞かれました。



起小学校から木曽川へは歩いてやってきました。学校の近くにワンドがあることは、初めて知った児童が多かったようです



魚の名前を調べる児童ら。見分けるポイントは、モニタリングを実施している調査会社の方に教わりました。魚をつかまえる作業が楽しそうでした。



簡易水質調査では、河川水の水質を計測。1滴だけジュースを入れる実験後には、「川にゴミをするのが悪いことだとよく分かりました」と話してくれました



一宮市尾西歴史民俗資料館の方から、昔の木曽川のお話も聞きました。かつての起水浴場の写真をみて、今とはまったく違う砂浜のような景色にびっくりです

■2018 年 1 月 27 日（土）

あいち生態系ネットワーク協議会地区間交流会が開催されました

〔愛知県名古屋市東区 ウィルあいち〕



参加されていたのは、大学の教員や学生、NPO や行政関係者から、環境コンサルタントなどの民間企業の方など、所属も多様な方々で、それぞれの立場から活発に意見交換されていました

愛知県では、大学・NPO・企業・行政等の多様な主体が連携し、生態系の保全・再生を図る「生態系ネットワーク協議会」が、県内 9 つの地区で設立されています。今回、開催されたのは、9 協議会関係者が集まる交流会で、ふだんはそれぞれに活動されている皆さんが、地区を越え、相互に意見交換や情報共有を図るはじめての場とのことでした（愛知県自然環境課主催）。

生態系保全や地域活性化といったテーマ別にテーブルを囲み、日頃の活動の課題を共有したり、専門家からアドバイスを受けたり、賑やかに意見交換されていました。総括コメント（名古屋大学名誉教授：武田先生）では、「異なるテーマでも、人材育成や生態系管理のあり方といった問題が共通課題としてあがっていたことは印象的」といったお話がありました。

木曽三川流域エコネット応援団でも、これから先、こうした参加団体の皆さんの活動に役立つ交流の場が持てればと考えています。

ニュース情報を募集しています！

木曽三川流域生態系ネットワーク推進協議会では、木曽三川流域におけるエコロジカル・ネットワーク形成に関連する地域の取り組み情報をニュースレターにまとめて発信しており、生物多様性の保全や生きものを活用した地域づくりなど、流域のフレッシュな情報を募集しています。下記お問い合わせ先まで情報をお寄せください。（なお、紙面の都合等で取材・掲載できない場合もありますこと、予めご了承ください。）



木曽三川流域生態系ネットワーク推進協議会（事務局：国土交通省木曽川上流河川事務所）とは、川とともに育まれてきた流域の自然や文化を保全・活用し、地域の魅力を向上させるとともに、人と自然・人と人との絆を深めることを目的とし、流域の自治体・河川管理者・有識者によって、平成 26 年度に設立されました。

本協議会では、木曽三川流域において、自然環境を保全・再生・創出してつなげる「生態系ネットワーク形成」に関連する活動を行う（または賛同する）、地域のさまざまな団体等に参加していただく「木曽三川エコネット応援団」を結成しています。応援団の皆さんの活動に関する情報共有を図ることにより、地域の交流・協働を促進し、取り組みのさらなる発展を目指していきます。

「木曽三川流域生態系ネットワーク」ホームページ（<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisojyo/econet/index.html>）



木曽三川流域生態系ネットワーク推進協議会事務局：国土交通省 木曽川上流河川事務所 河川環境課（岐阜県岐阜市忠節町 5-1）
【問い合わせ先（事務局窓口）】 cbr-kisojyo@mlit.go.jp / tel 058-251-1321 / fax 058-251-4301